

献 辞

経済学部での研究・教育に長きにわたってご尽力いただいた村上俊介教授が定年を迎えられ、2021年3月末をもって専修大学を退職されることとなりました。私たち経済学部スタッフ一同は、これまでのご功績に対して『専修経済学論集』第55巻第3号（通巻138号）を「村上俊介教授退職記念号」として呈上し、衷心より感謝の意を表したいと思います。

村上教授は、1973年に山口大学経済学部を卒業後、同年に専修大学大学院経済学研究科に進学され、1982年に専修大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学後、専修大学北海道短期大学専任講師・助教授を経て、1986年4月、専修大学経済学部専任講師として着任され、その後1987年に助教授、1997年に教授に就任し、今日に至ります。この間、1993年より1994年にかけてベルリン自由大学にて客員研究員として研究に従事され、また2006年7月から9月にかけてマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクにて客員研究員として、さらに2008年9月から10月、2015年4月から9月にかけては同大学客員教授として研究・教育に従事されました。また、2005年には立命館大学より博士（経済学）の学位を授与されています。

主にご担当いただいたのは、「現代市民社会論」「社会思想」「特殊講義」「ゼミナール」等でした。また、学内行政等の面では、学生部委員、図書館委員、教養教務委員、入試委員、教員資格審査委員、社会科学研究所長等の重職を歴任されました。

学会活動の面では、経済学史学会、社会思想史学会、政治社会学会等で活動されたほか、中国社会科学研究院主催のフォーラムで招待講演をされるなど、国際的な活躍も顕著でありました。

研究面での村上教授の足跡を振り返ってみるとき、社会思想史・経済思想史、とりわけドイツ市民社会論研究の分野において泰斗と呼ぶにふさわしい研究者であったことがわかります。村上教授は実に膨大な著書・論文を執筆してこられ、その業績は、マルクスにも影響を与えたヘーゲル左派の思想家ブルーノ・バウアー研究から、ドイツにおける市民革命論、現代市民社会論、ソーシャル・キャピタル論と多岐にわたり

ますが、そのいずれもが高い評価を受け、かつ重要な議論を提起するものとなっています。とりわけ主著『市民社会と協会運動』（御茶の水書房、2003年）は、日本とドイツにおける市民社会論の蓄積を基礎に、市民社会を「労働に基づく所有」を体現した諸個人の生産・交換関係として、またその社会的審級においては近代に固有な「自由な諸個人のアソシエーション」と定置した上で、市民社会の歴史具体的展開としての、ドイツにおける1848/49年革命を担った「協会」組織（Vereinwesen）の分析を通じて、市民社会論の可能性を問う作品であり、重厚かつ精緻な歴史研究・思想史研究に裏付けられつつも、すぐれて今日的意義をもった、名著の誉れ高いものです。こうした研究業績からは、村上教授の学問に対する並々ならぬ真摯な姿勢がうかがえると言えるでしょう。

ご退職にあたり、次のようなメッセージをいただいております。

私と専修大学の関係は、大学院から始まって48年間にもなる。教員としては3年間の北海道短大、そしてその後の35年間をこの生田で過ごした。その中で、記憶に強く残るのは1993-94年ベルリンで過ごした在外研究、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク日本学科大学院での2008年と2015年の集中講義、学内の研究プロジェクトで訪れた東南アジア諸国の研究機関との交流などだ。それらはいずれも直接・間接に専修大学が与えてくれたチャンスによって可能になった。専修大学に感謝したい。

職業生活上、必要な基礎訓練は大学院での望月清司先生のご指導によるものだ。先生への感謝の意は一言では表しきれない。また長らくお付き合いいただいた経済学部や社会科学研究所の同僚の方々に、心から御礼申し上げる。

最後に、日ごとに春めく季節になってきたとはいえ、新型コロナウイルス・パンデミックの行方も不透明な中、長年にわたって共に働き導いてくださった村上教授が本学から去られることは、後に残される私たちにとってまことに寂しいことではありますが、先生には本学を退職された後もご健康にお気をつけて末永くお元気ですごされますようお願いするとともに、学術研究の世界におけるさらなるご活躍を祈念してお

ります。そして、専修大学及び経済学部発展のために、折に触れてご助力いただけますようお願い申し上げます。以上、村上俊介教授の古稀と定年での退職を心より寿ぎつつ、これまで賜ったご指導への深謝の念をこめて私からの献辞とさせていただきます。

2021年3月

専修大学経済学部長 兵頭 淳史